

# 読み捨てられた『サンデー毎日』の貴重性

―大正・昭和戦前期の大衆娯楽誌―

日本大学商学部教授 刑部 芳則

## 大正時代から昭和戦前期の『サンデー毎日』は閲覧が困難

『サンデー毎日』は、大正十一年（一九二二）四月二日に、（現・毎日新聞大阪本社）の新社屋（大阪市北区堂島）の落成記念の一環として創刊された。創刊号の表紙は、同年に上野で開催された平和記念東京博覧会の写真が使われた。創刊号はタブロイド判、グラビア四頁、本文二四頁で定価一〇銭であった。『サンデー毎日』は同年に刊行された『週刊朝日』と並んで日本で最初に創刊された総合週刊誌の一つである。

大正時代から昭和戦前・戦中期の生活や文化を知る上で豊富な情報が掲載されているが、それらを通覧することは容易ではない。戦前期の『サンデー毎日』を所蔵する機関は、大学図書館を含めて二九館しかなく、『週刊毎日』と改題された昭和十八年（一九四三）二月七日号以降は六館に限られている。また海外に目を広げると、戦前期の『サンデー毎日』はワシントン大学、カリフォルニア大学、バークレー大学、オーストラリア国立図書館などが所蔵しているが、昭和十五年（一九四〇）以後のものばかりであり、『週刊毎日』と改題されてからは台湾の中央研究所に限られる。

しかし、どれも欠号が多く、創刊号から終戦の昭和二十年（一九四五）までを通覧することはできない。国内では大衆娯楽雑誌という性質もあって、大学図書館の講読対象にしてこなかった。そのため、昭和時代を通して『サンデー毎日』は古新聞と同じような感覚で読み捨てられて、ほとんど原紙が存在しない希少雑誌と

なってしまった。

そのようななかで日本近代文学館のように多数の『サンデー毎日』を所蔵しているところもあるが、刊行から百年から九十年が経過しているため、史料保存の観点から貴重書扱いを受けて、原紙の閲覧はもとより、その複写をするのにも大きな制限がかけられている場合が少なくない。また仮に複写ができたとしても、『サンデー毎日』は縦三八cm、横二六・四cmと大判のため、折らずにB四サイズの紙を保存しなければならなくなる。したがって、今回のデジタル版による『サンデー毎日』の復刻版は、貴重な原紙を痛めることなく、これまで困難であった通覧を可能にするなど、非常に大きな意味を持っている。

デジタル版による『サンデー毎日』の復刻版の第一弾では、大正十一年四月二日号から昭和十五年九月二十九日号のB四版（グラフ版）を対象とし、B五版（大衆文芸号など）は除いた。また第二弾では、B五版（新体制規格版）による昭和十五年十月六日号から同十八年一月三十一日号と、『週刊毎日』に改題した同十八年二月七日号から同二十年十二月二十三日号までを刊行する。

## 大衆人気作家の小説

『サンデー毎日』の読者が毎週楽しみにしていたものに連載小説がある。大正十一年には芥川龍之介、同十二年（一九二三）には菊池寛、里見弴、田山花袋、幸田露伴、高浜虚子、泉鏡花、長谷川伸、尾崎士郎、佐々木味津三といった作家の読み切りが確認できる。大正十二年一月一日の新春特別号は「小説と講談」とあり、この両方が当時の大衆娯楽の王座を占めていたことがうかがえる。連載小説としては、大正十二年一月十四日号から始まった吉井勇「夜鳥物語」が最初である。大正十三年（一九二四）五月二十五日号から連載が始まった白井喬二「新撰組」では挿絵が入った。これ以降、読み切りと連載とにかかわらず、小説に挿絵が添えられるようになる。

こうした小説を掲載することは大衆を楽しませるだけではなく、それらの人気

作家を目標とする作家を生み出した。その登竜門が大正十五年（一九二六）から始まった大衆文芸賞の募集である。第一回は角田喜久雄「発狂」が一等に入選した。年に二回募集が行われた当選者からは、海音寺潮五郎（昭和四年「一九二九」第五回「うたかた草子」）、井上靖（同十年「一九三五」第十七回「紅荘の悪魔たち」）、藤野莊三（山岡莊八）（同十三年「一九三八」第二十三回「約束」）など、文学史上に名を残す作家が生まれた。

『サンデー毎日』の小説には、昭和戦前期の人気作家が集結している。昭和二年（一九二七）から十五年までに掲載された主な連載作品には、直木三十五「風流殺法陣」「益満休之助」、長谷川伸「馬頭の銭」「傳法ざむらひ」、海音寺潮五郎「風雲」「愛憎」「本朝女風俗」「柳沢騒動」、子母澤寛「弥太郎笠」「松五郎鴉」、吉川英治「松のや露八」「遊戯菩薩」、サトウハチロー「弾ずむ歌」、川口松太郎「舞ころも」「恋愛戦争」「月夜鴉」「三味線武士」「芸道一代男」、竹田敏彦「鉄窓生活三十五年網走小僧懺悔録」、井上靖「流転」、林芙美子「女の愛情」、横溝正史「仮面劇場」、丹羽文雄「職業もつ女」、白井喬二「地球に花あり」、大佛次郎「夕焼富士」、吉屋信子「鳶」、尾崎士郎「雲になる男」などがある。また読み切りには、横光利一、室生犀星、小島政二郎、宇野千代、林不忘、川端康成などの作品が散見できる。

芥川龍之介が昭和二年七月二十四日に死去するため、その後に彼の作品が『サンデー毎日』に登場することはなかったが、彼に替わって直木三十五の作品が登場している。後に芥川賞と直木賞の創設となる二大作家が『サンデー毎日』に寄稿していたことは意外である。彼らの文芸作品は、現在でも国語の教科書に掲載されるが、『サンデー毎日』の寄稿作品が対象とされることはないと言っても過言ではない。

日本近代文学史においてもアカデミックな芸術作品については研究対象とされるが、当時人気の大衆娯楽作品については顧みられることは少ない。大衆作家のため全集が刊行されていなかったり、また全集があっても娯楽向けのために収録されていない作品が、『サンデー毎日』には溢れている。これまで読むことが困難で

あった有名作家の影に隠されてしまった作品が、今回の復刻版で読むことができるようになったことは大きい。時代劇と現代劇とが両立しているところには、昭和モダニズムの文化（和洋折衷の生活文化）が表れていると言える。

## 映画と流行歌

映画は昭和戦前期に大衆娯楽の王様であった。しかし、『サンデー毎日』の創刊号から映画の情報が載っていたわけではない。映画情報の初登場は、大正十五年三月十四日号の松竹京都『大楠公』を紹介した記事である。洋画の紹介記事は、昭和三年（一九二八）一月一日号の「映画見たまゝ」から始まる。そして昭和五年（一九三〇）には「誌上映画」と「映画界噂話」のコーナーが設けられている。

日本では昭和五年の『マダムと女房』を境にしてサイレント（無声映画）からトーキー（有声映画）へと変っていくが、この転換点の年に『サンデー毎日』で映画の企画記事が拡大されているのは偶然ではないだろう。昭和八年（一九三三）からは毎週号において邦画と洋画のスチール写真を組み合わせてグラビア頁を設けている。毎週最新の封切り作品を読者に届ける意味があった。

これが読者にも人気であったと見えて特集号にも変化が表れる。新春、春季、夏季、秋季、年末などの特別号は「小説と講談」に決まっていたが、それが昭和十年四月一日の臨時増刊『サンデー毎日春の映画号』から映画特集号へと一新する。邦画と洋画のグラビアを豊富に使い、映画俳優のインタビュー記事を掲載している。この号では作家の長谷川伸、映画監督の衣笠貞之助、俳優の林長二郎（長谷川一夫）の「時代映画名トリオ座談会」を設けた。

この豪華な座談会は人気コーナーとして継続された。昭和十一年（一九三六）三月二十日の「春の映画号」では林長二郎、田中絹代、水谷八重子の「日本映画を語りあふ座談会」、六月十四日の「夏の映画号」では古川ロッパ、徳川無声、榎本健一の「映画無軌道座談会」が行われている。また昭和十三年四月十五日の「春の映画



号」では「片岡千恵蔵、市川右太衛門独立プロダクション問答」という、戦後に東映を二分する存在となったライバル対談が実現した。昭和十四年（一九三九）七月十五日の「夏の映画号」では、日中戦争に出征した松竹三羽鳥の一人である関口正三郎「佐野周二陣中日記」が掲載された。

昭和戦前期は大衆作家が新聞や雑誌に連載し、それを映画化するとヒットする可能性が高かった。『サンデー毎日』でも、「新興キネマ上映 映画小節募集」の記事を掲載している。一等一篇二〇〇〇円、二等二篇五〇〇円という賞金がかけて、出演は新興キネマが誇る高田稔、中野英治、岡田時彦、入江たか子、森静子、鈴木澄子の俳優陣が予定された（昭和八年三月二十六日号）。

戦前に封切られた作品で現存するものは少ない。したがって、映画の写真や内容については、現存しない作品を確認する上で重要なものである。『キネマ旬報』や『スタア』といった映画雑誌はあったが、『サンデー毎日』のグラビア頁や最新映画の記述は、両誌とともに貴重な情報といえる。とくに現在では見ることできない、新興キネマや日活の作品が数多く散見されるのも『サンデー毎日』の特徴である。

昭和十年代を迎えると、映画に加えて流行歌の情報が見られるようになる。これは大衆音楽のなかでも義太夫や端唄などの邦楽から、それらに洋楽が入った流行歌へと人気が変化してきたことを物語っている。本人が執筆したものではないが、東海林太郎「無題徒然一夕話」、徳山璉「トーキー一年生」と題する読み物も登場する（昭和九年「一九三四」十一月四日号）。

歌手の情報としては、歌手を出身地別に紹介した北原八十「歌ふ人国記」（昭和十一年五月三日号〜六月十四日号）が詳しい。レコード業界の話としては、上月又雄「火花を散らす人気歌手争奪戦 レコード界をスパイする」（同年十月十八日号）が当時の流行歌界の一面を浮き彫りにする。内務省の流行歌の捉え方については、「非常時円盤風景」（同十三年十月九日号）が貴重な情報を教えてくれる。

## 美術とスポーツ

『サンデー毎日』では絵画を載せたグラビアや、芸術家の随筆が散見される。大正十一年六月十八日号では伊東深水「私から見た夏の婦人美」、六月二十五日号では川端龍子「最後の闘牛見物」が掲載されている。これらの背景には大阪毎日新聞社主催で日本美術展覧会を開催していたことがあると考えられる。実際、大正十二年十月二十一日号と二十八日号では、同社主催の日本美術展覧会について紹介している。また同社主催ではない「軍国美術の秋・二科展」（昭和十三年九月十八日号）、「秋の美術・文展」（同十四年十月二十九日号）など美術展覧会も紹介しており、読者に美術鑑賞の楽しさを伝えた。

日本画家の座談会としては、山口蓬春、川端龍子、小林古径の「京の春に集った！東西画匠よもやま話」（昭和十五年五月十二日号）が貴重といえる。昭和になると洋画家の随筆も目立つようになる。東郷青児「海と山のない夏」（昭和十一年八月九日号）、藤田嗣治「時局と戦争画」（同十三年十月九日号）などが挙げられる。こうした随筆からは、彼らがどういう景色や風景を目にしたかを知ることができる。それは生み出された作品を鑑賞する上で、創作背景を知る手がかりとなる。『サンデー毎日』には、そうした日本近代美術史の手がかりとなる情報が沢山落ちていくのである。

また現在では日本の漫画は世界に誇れる美術的価値があるが、その黎明期の作品たちが『サンデー毎日』には掲載されている。『報知新聞』に「ノンキナトーサン」を連載して人気となった麻生豊をはじめ、『少年倶楽部』に「のらくろ」シリーズを連載した田河水泡、『朝日新聞』に「フクちゃん」を長期連載した横山隆一など、漫画界の黎明期を支えた書き手の単発作品を読むことができる。このうち横山は『サンデー毎日』の小説の挿絵も複数手掛けた。

小説の挿絵では岩田専太郎、伊東深水、堂本印象、林唯一、宮本三郎、小林秀恒が起用されている。林唯一と小林秀恒は、戦前の大衆雑誌ではお馴染みの挿絵画

家であり、とくに現代劇の描写が秀逸である。また太平洋戦争中の戦争画として注目される宮本の作品を多く見られるのも魅力の一つといえる。挿絵で一番多いのは岩田であり、彼は『サンデー毎日』の表紙の女性像も複数描いている。他に有名な画家としては鏑木清方「牡丹燈籠のお露」を表紙にしたものがある（『秋季特別号小説と講談 怪談号』昭和三年十月一日）。

『主婦之友』の表紙が有名画家の女性像で飾ったのに対し、『サンデー毎日』の表紙は創刊号から写真が使われていた。ここはむしろ紙面の大きさも同じ朝日新聞社の『アサヒグラフ』への対抗意識が感じられる。それが昭和八年一月号から書き手は不明だが、映画女優などを写真のように描いた女性像へと変化した。そうしたなかで岩田のような画家を起用して表紙を書かせる号は少なかった。『サンデー毎日』の読者に絵画の魅力を伝えたのは、小説の挿絵であったといって過言ではない。

室内での美術鑑賞とは対照的に屋外でのスポーツ鑑賞にも力を入れていた。大正十二年八月五日号で「日本で最初の女学生の野球競技」を紹介し、十二月九日号の表紙に「ヴァーレーボール戦 大手前女学校における第一回大会の日」を使うなど、高等女学校の生徒たちのスポーツ競技が普及してきたことを伝えた。また十二月十六日号では吉田興山「早慶戦復活の可否」を取り上げているが、これ以降大学野球である早慶戦の記事が見られるようになる。

大阪毎日新聞社主催で全国選抜中等野球大会が行われるようになると、毎年その記事が掲載された。スポーツのなかでも野球は人気があったと見えて、「選抜野球座談会」（昭和十年三月二十四日号）、「東京六大学野球リーグ戦」（同年四月二十一日号）、「職業野球を語る」（同十一年三月一日号）、「都市対抗野球観戦記」（同年八月二十三日号）など、野球の記事は多く掲載されている。

野球と並んで人気であったのが相撲である。「大相撲夏場所のぞ記」（昭和十一年五月三十一日号）、鈴木彦次郎「花形力士評判記」（同十二年「一九三七」一月十七日号）、徳永直「東京大相撲春場所スポルタージュ」では、双葉山など力士の情報を

報じている。この他にも、高橋謙之「今秋の呼馬は？競馬界の展望」（昭和十一年十月四日号）、芦田万寿夫「スケート」（同十二年一月三日・十日号）、竹節作太「ことしのスキー界展望」（同十四年一月一日・八日号）、「東西対抗ラグビー戦」（同年一月二十二日号）のように、各種スポーツの話題を取り上げている。

スポーツ界のヒーローの談話も見逃せない。人見絹枝「私の日課」（大正十五年九月十二日号）と、「水のヒロイン前畑秀子嬢」（昭和十一年三月八日号）は、当時の女学生たちに人気であったオリンピックのメダリストの話題を紹介する。スポーツ選手の結婚相手は、読者の羨望であった。そのため、昭和十年一月から四月まで「スポーツマン恋愛名鑑」を十三回にわたって連載している。スポーツ選手の結婚に至る恋愛秘話を紹介する。このように丹念に読み拾っていくと、新聞だけではわからない戦前のスポーツ界を知ることができる。

## 昭和モダニズムの生活文化

『サンデー毎日』を通覧してみると、昭和戦前期の昭和モダニズムがよくわかる。紙面の斬新な企画として注目できるのが、クロスワードパズルの存在である。大正十四年（一九二五）三月一日号で「嵌め字」として例題と解き方を示し、三月八日号から「クロス・ワード・パズル」を連載した。これが日本初のクロスワードパズルと言われている。

女性の購読者を意識してか、髪型、パラス、シヨール、ネクタイ、背広、靴、オーバー、流行色、七五三用の子供洋服など、百貨店の広告誌を飾るような写真とともに、流行の最先端を伝える記事が散見される。昭和四年三月三日号の「大阪三越 マンスリー」では、履物、ハンドバッグ、シヨール、紳士用の帽子やネクタイをグラビアで紹介している。こうした記事を目にして買い物に行く婦人客に対しては、地引清助「デパート内の礼儀作法」（昭和八年三月二十一日号）で、マナーを伝えることも忘れなかった。



女性の髪型については、大正十三年十月二十六日号で「東京で今流行の髪は髷なし・オールバック」と紹介したが、翌十四年五月十七日号では「近頃流行の束髪の結び方」で奥様向きの銀座巻と令嬢向きの清月巻を紹介しているように、すぐに髷はなくならなかった。しかし、昭和十年代を迎えると、髷のない洋髪の記事が目立つようになる。メイ・牛山「美容室ナンセンス」では、美容室の奇談を紹介する（昭和九年四月一日号）。昭和十一年に宇野千代が編集長となって創刊した『スタイル』では美容室の宣伝広告が散見されるが、若い女性の間でパーマネントは人気となった。『サンデー毎日』でも日本髪だけではなく洋髪の紹介が増えてくる。

しかし、女性から和服の人気は衰えなかったため、「婦人の防寒コート 絹物が流行で」という見出し記事では、二名の和服のコート姿の写真を掲載している（昭和九年十二月二日号）。女性の洋服は未成年者から普及したが、「家庭ページ 娘さんの洋服」（昭和十三年五月二十二日～六月十九日号）では、当時人気であったセーラー服の仕立て方が紹介されている。母親の和装と娘の洋装と、親子で好みがかかっている点が面白い。

昭和十年前後頃には流線型が流行したが、中正夫「時代の寵児 流線型」はその点について解説する（昭和九年十二月二日号）。藤田耕「サイクリング礼讃」（同十一年三月十五日号）や宮地嘉六「自転車礼讃」（同十二年七月十八日号）からは、若年層を中心に自転車が普及していることがうかがえる。釣りや金魚の鑑賞は古くからあるが、「釣之話」（大正十四年七月五日号）や「水中のおしゃれーらんちゅうを飼ふ」（昭和十二年六月二十七日号）など、根強い人気があったと見えて、しばしば記事として取り上げられている。

大正時代には観光雑誌『ツーリスト』や『旅』が刊行されたように、新婚旅行や修学旅行など、国内旅行が娯楽要素の一つとなった。しかし、一般庶民にとって高額費用を要する長旅は高値の花であり、雑誌のグラビアで目の保養にした者も少なかった。『サンデー毎日』は、そうした読者の希望に応える役割もはたしていた。観光名所として人気であった伊豆大島については、「東京文化学院生徒の伊豆

の旅 三原山を超えて」と題して紹介した（昭和八年六月十八日号）。北海道については岡崎茂治「南十勝海岸の大景観」が、北の大地の魅力を読者に披露している（同年八月六日号）。また「吉野群山を語る」という座談会も行われた（昭和十年六月二十三日号）。この他にも「隠れた名勝・知られぬ山水」をシリーズで連載しているが、それらは『ツーリスト』や『旅』の要素と重なる。

昭和十二年七月七日に日中戦争が始まってからの繁華街の風俗についても参考になる記事は少なくない。戦時下ではコーヒーの代用品が主流となるが、「喫茶店繁盛時代」（昭和十三年一月二十三日号）では、まだコーヒーを楽しむ余裕があったことが伺える。阿部真之助「パーマネント・ウェーブ禁止」（同十四年七月九日号）は、敵視されるパーマネントについて寄稿している。また市川房枝「都会人は自粛自戒しているか？余りに無反省な持物の消費態度」（同十四年八月六日号）は、戦時下という非常時の意識に欠ける消費者態度を警告している。昭和十五年十一月一日に男性の服装を統一するために制定された国民服については、法制化される前に「男子服の統一 国防力充実を目指し国民服の誕生」（同十五年二月十八日号）で紹介した。徐々に生活内容に戦時色があらわれていることがわかる。

『サンデー毎日』の娯楽性を重視した紙面構成は、昭和十五年十月六日号で縦二五・八cm、横一八・三cmのB五版（新体制規格版）へとサイズが小さくなるのとともに一変する。これより少し前の八月二十五日号の表紙画を女優の原節子が飾ったのを最後に女性像は消え、九月一日号はモンペ姿の防空演習、九月十五日号は敵前上陸など、表紙も時局に合わせた絵が用いられるようになる。そして同年十月十二日に大政翼賛会が発足して新体制運動が展開されると、国策を重視した内容が色濃くなる。昭和十五年十一月十日号では「自粛する音盤界 新体制下のレコード!」、十一月十七日号では「新体制で楽になる婦人の結婚の支度」など、新体制を掲げた記事で溢れる。

そして昭和十六年（一九四一）十二月八日に太平洋戦争に突入し、徐々に戦局が悪くなってきた同十八年二月七日号から『週刊毎日』へと改題した。これは出版社

側が『サンデー』という敵性語の使用を続けることが苦しくなったことを物語っている。戦争に勝ち抜くため「月月火水木金金」であり、『日曜毎日』という訳にはいかなかった。